右のQRコードで
西村くにこの各種SNSに
アクセスできます！
ぜひ登録してください。

LINE　X（旧Twitter）　instagram（@KUNIKO_NISHIMURA）　Facebook

帯状疱疹ワクチン　いよいよ「定期接種」へ

多くの方にご要望いただいていた「帯状疱疹ワクチン」の定期接種が、具体的に動き始めました。

効果があっても高いワクチン！

「年金暮らしにはとても無理！」との声をいただいた西村くにこは、ワクチンの定期接種化と費用の負担軽減に向け、２０２２年１１月、公明党地方議会局次長として公明党の地方議員に、①国に対し制度改正を求めるとともに②各自治体での負担軽減に取り組むよう呼びかけました。これを受け「帯状疱疹ワクチンへの助成並びに定期接種化を求める意見書」は多くの議会から提出され、独自に接種費用を助成する自治体も、全国でおよそ７００自治体に上りました（ＧＳＫ株式会社調べ）。

地方が国を動かした！？

神奈川県議会でも公明党は代表質問で、「ワクチン助成を行う市町村への補助などを含めた環境づくりに取り組むこと」を知事に求め、「国に対し早期の定期接種化を要望し、予防接種の事業主体である市町村の状況や意向を確認しながら接種費用の補助について検討する」との答弁を得ました。

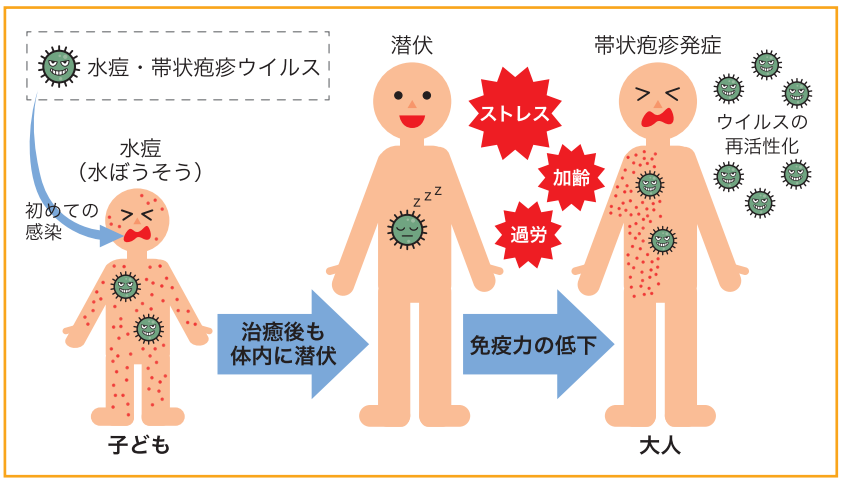
こうした地方議会での議論や支援体制の拡充が後押しとなり、本年６月、厚生労働省での専門委員会では、費用対効果が期待できるとして、帯状疱疹ワクチンを定期接種に加える方向性が示されました。

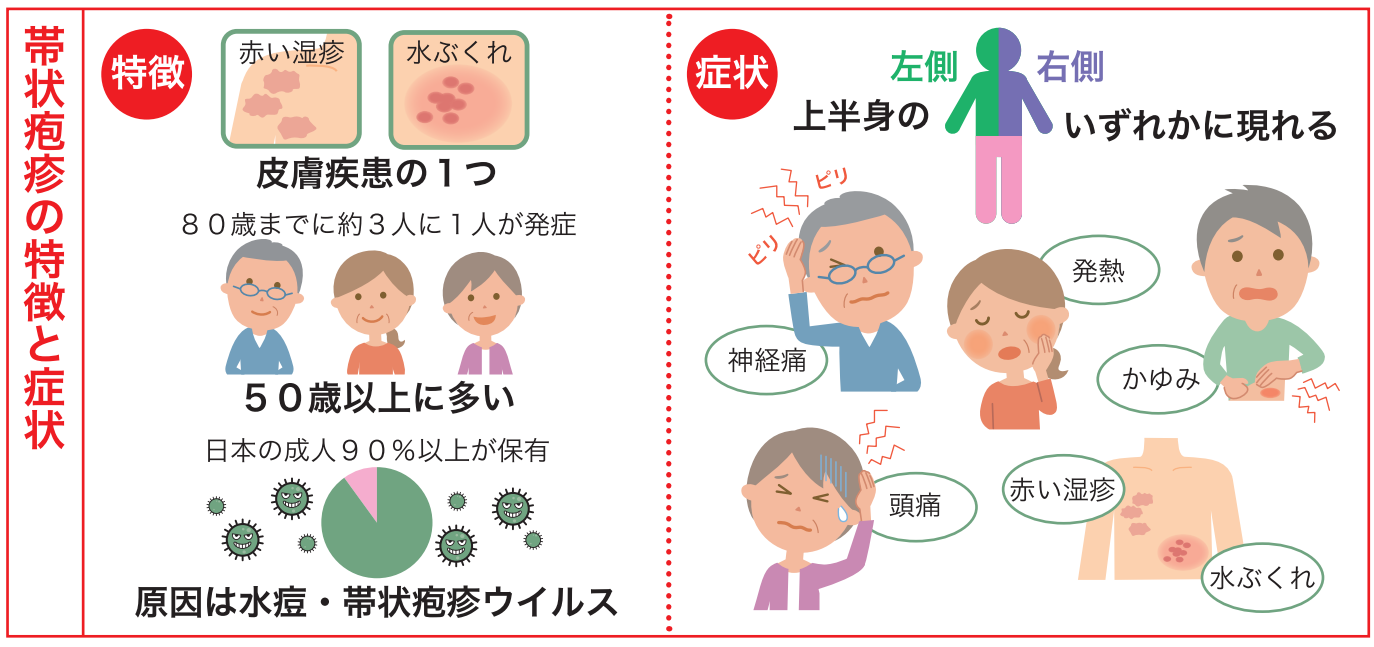
今後は、ワクチンの接種希望者が接種時期を先延ばしにすることのないよう、国に対し早急に定期接種を決定することを求めるとともに、その公費制度が、先行して助成を実施している市町村の助成条件（対象年齢や助成額等）より後退することがないよう訴えてまいります。

帯状疱疹とは？

水ぼうそうと同じウイルスで起こる皮膚の病気。体の左右どちらかの神経に沿って、痛みやかゆみを伴う発疹が帯状に現れる。発症には加齢が関係しており、５０代から発症率が急激に上昇し、６０代、７０代と発症率は高くなり、８０歳までに約3人に1人が発症するといわれている。また、皮膚症状が治った後も痛みが続く「帯状疱疹後神経痛」といった後遺症が残る場合もあり、ＱＯＬ（生活の質）にも影響を与える。

現在、予防に有効なワクチン接種は、全額自己負担の任意接種であり、高いものでは接種に４万円程度かかる。





県立病院でヘルプマークを配布

義足や人工関節を使用している方、内部障がいや難病の方、また、妊娠初期の方など、外見から分からなくても援助や配慮を必要としている方々が、周囲の人に配慮を必要としていることを知らせ、援助を得やすくなるようにする目的で作成された「ヘルプマーク」。神奈川県では平成２９年３月から導入しており、認知度も上がってきました。しかし、配布されるのは基本的に自治体の福祉関連窓口。サポートを必要としている人が、わざわざ出向かなくては入手できない体制になっています。人工関節手術や、通院での抗がん剤治療など、退院直後や通院にヘルプマークを必要とされる方々が多くいると考えられることから、西村くにこは病院での配布を厚生常任委員会で提案。神奈川県では、本年３月から県立病院でもヘルプマークの配布が始まりました。今後は、希望される他の病院でも配布できるよう働きかけてまいります。



ヘルプマークは東京都福祉保健局により２０１２年に作成。現在は神奈川県をはじめ全国にも拡がっています。